



## 四

月から月に一、二回のペースで高尾小学校に落語の稽古に通っている。教員の異動もあり、よくわからないので手伝ってくれないか、と依頼があったものである。高尾小の職員は決して言わないし、思ってもいないと信じるが、「あなたが始めたんだから責任取れよな」という声は自身の中から常にしめやかに聞こえてくるので、すぐさま引き受けた。

十年前にぼくが赴任したときは十一名いた児童も、今年度はきょうだい二組、三年生を除いた二年生から六年生一人ずつで全校四名になった。ぼくが三・四年生の児童と落語をしていたときは、週に多くても二時間程度の稽古だったと記憶しているのだが、この三月に中学校を卒業した子どもたちがメッセージをくれた中に「あのころは落語漬けでしたね。」などと懐かしそうに書いてあった。誤解である。他にやらねばならない学習も活動もどっさりとおるのだから漬けてはいないはずなのだが、そのように思われても仕方ない空気があったかもしれない。

今の高尾小ではクラブ活動として取り組んでいる。隔週一時間だけで落語など土台無理な話なので、家族を相手に家で稽古するというのがどうやら習慣になっている。この間は、夏の定期寄席に向けて新ネタを仕込んでいるからそれを聞いてほしいということだっ

た。ここで紹介しておく、二年生は小咄、四年生「まんじゅうこわい」、五年生「時蕎麦」、六年生「牛ほめ」というラインナップである。

「まんじゅうこわい」は、ほんとうは大好きなまんじゅうを見るのも怖いと嘘をついてまんまと友人たちからせしめるといふ有名な古典落語で、見所は怖がらせようと投げ込んだまんじゅうをムシャムシャと食べるところだ。今度ネタおろしをするのは、四年生の女子児童である。しゃべらせてみたら、案の定「もぐもぐ」などとテキストをそのまま読んでいた。そこでぼくは本物のまんじゅうを渡して「お姉ちゃんに内緒」と言いつて食べさせた。すると、ほんとうにおいしかったらしく、人間幸せに満たされた時はこんな顔になる、というような食べ方をした。もらい泣きならぬもらい幸せにぼくはつい、「それだよ、それ」と叫んでしまった。たとえ本番で真っ白になって話が消えようとも、その笑顔を見せられますように。

さて、高尾小学校の「にこにこ寄席」は、七月十五日(土)午前十時開演。奥出雲町立高尾小学校にて(入場無料)。観覧希望の方は当方までお知らせいただければ学校に連絡します(メ切十二日)。できるだけ事前申し込みを。問い合わせは、高尾小学校(電話〇八五四―五四一九〇三〇)まで。

空き家 13

## 木幡智恵美

生家⑤

十二年間に三度も葬式を出し、隣保の人たちには随分お世話になった。だから、隣保で誰かが亡くなると、手伝いに行かねばならないと思っていた。ただ、子どもが小さくて手がかかる上、仕事もなかなか休めないのが、父の実家の主である伯父の連れ合いが代わりに出てくれていた。その伯母から、「私も年でねえ」と言われ、私が出るようになったのは、子どもたちが大分大きくなってからのことだ。

はじめの頃は、隣保所有の膳、椀などを使い、煮炊きや盛り付け、配膳なども普通に行っていた。手伝いに出る女性たちは、少しずつ代替わりをしていき、ずつとみそ汁の味見をしていたお婆さんに替わってお嫁さんが出られるようになってからは、なぜか味見は私の係になっていた。膳や椀を使わなくなったのは、仕出し弁当に替わってからだ。それでも、漬物や蒲鉾を切つて盛り付けたり、みそ汁を作つたりしていたが、家ではなく、新しくできた会館で行うようになると、葬儀屋がほとんどのことをやるようになった。女性たちは、ちよつとした買い出し、蒲鉾や漬物を切るくらいで、おしゃべりしている時間が増えていった。その間に、空き家も少しずつ出てきている。

年度替わりには、自治会長宅にあいさつに行き、一年分の香典代や区費の支払いをお願いするのだが、数年前、「智恵美さん、もう葬式の手伝い、いいけんね」と言われた。若い世代に替わってからは、私より一つ年下の彼女が年長者もまとめて葬儀の裏方を仕切っている。「出ても、することないけん。私が皆に言つちよくけん、参列だけするだわ」と言つてくださった。以来、葬儀に出るだけにさせてもらっている。

この春、ふと隣保を数えてみると、五軒、半分だ。自治会長宅にあいさつに行くと、「毎年あいさつに来られるの、智恵美さんだけだよ。もういいわね」と言われる。隣保は少なくなり、葬儀だけでなく、近所づきあいも変わってきている。いつまで生家の付き合いを続けるか、思案しているところだ。

30代フリーター ロシアの民間軍事会社ワグネルの創設者プリゴジンの「反乱」を「プーチン体制の終わりの始まりを意味するのではないか」と見る専門家がいます（名越健郎、拓殖大特任教員）。ロシア政治史、6月26日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 「反乱」は、ロシアがいまなお前近代的な「帝国」であること、そのゆえの統治上の弱点を抱えていることをあらわにした。

「帝国」の特徴は域内に政治権力を持つ大小様々な勢力を抱えていることにある。平等な国民からなる近代の国民国家と大きく違うところだ。それらの諸勢力は「皇帝」に忠誠を誓う代わりに、特定の地域や分野での権限を配分される。柄谷行人の交換様式論を借りていえば、両者のあいだには交換様式BⅡ服従と保護（略取と再分配）が成立している。

ワグネルはそうした諸勢力のひとつであり、「皇帝」プーチンに忠誠を誓う見返りとして、軍事力を保持、行使

する権限を与えられた。そうした両者の「交換」関係に不均衡が生まれ、不満を募らせたプリゴジンが「反乱」を起こしたと推定される。

30代 モスクワへ進軍を開始し、ロシア南部の国軍の施設を占拠したワグネルについて「2・26事件をほうふつとさせる」と指摘した専門家がいます（笹川平和財団主任研究員・畔蒜泰助、6月25日朝日新聞朝刊）。

年金 決起した青年将校らを大日本「帝国」内の諸勢力のひとつと考えれば、その指摘は納得できる。彼らは「帝国」の「皇帝」である天皇とのあいだでBの「交換」関係を結んでいたとみなすことができる。

2・26事件が鎮圧されたあと、国家総動員法が成立し、戦時体制が強化された経緯を振り返ると、大日本「帝国」はこの事件を契機に、「皇帝」と諸勢力との「交換」関係を軸とした統治のシステムから、国民を直接かつ一律に支配する統治に切り替え始めたように見える。その意味では国民を平等

な存在として扱う国民国家にわずかながら近づいたと言いうこともできる。20世紀の戦争を特徴づけた「総力戦」にはそのほうが有利だからだ。

2・26事件の青年将校らが「逆賊」の烙印を押された末に投降したように、プリゴジンもまたプーチンから「裏切り」「反逆」と指弾され、矛をおさめた。そのあと演説したプーチンはワグネルの戦闘員に「国防省などと契約し、ロシアの兵役を続ける機会がある」と呼びかけた。彼はこと軍事に関する限り、域内の諸勢力に頼る「帝国」的な統治をやめて、国民を直接かつ一律に動員する「国民国家」的な統治に切り替えたがっているように見える。

30代 ベラルーシ大統領のルカシェンコの仲介で、ワグネルの「投降」とプリゴジンのベラルーシへの「追放」が決まった。

年金 その経緯に「帝国」のもうひとつの特徴があらわれている。「帝国」は域内に諸勢力を抱えるだけでなく、

域外に服属国あるいはそれに準ずる国を持ち、それら諸勢力、諸国家との「交換」関係によって統治のシステムを形成している。国民国家なら今度のような事件は国内だけで処理しようとするはずだ。ロシアは「帝国」なので、その服属

国のベラルーシを公然と使った。30代 「反乱」を「裏切り」と非難したプーチンの演説の中には、1917年のロシア革命も「同じ裏切り」だったとして、その再現の警戒を呼びかけるくだりがあった。

年金 1世紀前のその「裏切り」をロシアは「第1次世界大戦のさなかに受け」「勝利は奪われ」「軍の破壊、国家の崩壊、甚大な領土の喪失をもたらした」「その結果が、内戦という悲劇だ」とプーチンは訴えた。

10月革命で成立したソビエト政府は交戦国のドイツなどと講和条約を結んだ。敗戦国となったロシアはそれまで領有していたフィンランドやポーランド、ウクライナなどの地域を失った。やがて反革命軍と赤軍の内戦が始ま

ニュース日記 883  
中村 礼治

## プーチンが恐れるもの

る。プーチンはそれらをすべて「裏切り」の結果とし、「われわれはこのようなことが再び起きることを許さない」と強調した。

30代 その決めつけは、これまでのプーチンの姿勢と矛盾しているんじゃないか。彼は第2次大戦でナチスドイツを破った戦勝記念日の5月9日を祝

うことにずっと力を入れてきた。その戦争を指導したのはレーニンの後継者スターリンだ。その政権による戦争の勝利を祝うことは、さかのぼって「裏切り」を祝うことにつながる。

年金 その「矛盾」に気づかなかつたのか、あるいはそれを承知で演説したのか、どちらにしても、この「なりふりかまわなさ」はプーチンがプリゴジンの「反乱」をロシア革命並みに「過大評価」していたことを物語っている。言い換えれば、プリゴジンの「裏切り」だけにとどまらない政権の危機が生じ始めていると判断していたことをうかがわせる。

ロシア南部の都市ロストフナドヌーの住民たちが、街に入つて来たワグネルの戦闘員たちに拍手を送る姿を見て、プーチンは民衆の反乱が戦争を止めたロシア革命のときのように、今の戦争を続けられなくなり、100年前と同様に再びウクライナを失うかもしれないと脅えたに違いない。そうなれば自分の命も危ない、と。